海外大学との PBL 型国際共修
－地元企業と連携したグローバル教育実践－

清藤 隆春
KIYOFUJI, Ryushun
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

齋藤 亨子
SAITO, Yukiko
Center for Language Studies
National University of Singapore
シンガポール国立大学語学教育研究センター

橋本 智
HASHIMOTO, Satoshi
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

要旨：2021 年度前期より、徳島大学高等教育研究センターでは、全学的なグローバル人材育成に着手し、「グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resource Intensive Program）」を開始した。GRIP のプログラムの１つとして、シンガポール国立大学の日本語履修学生達と約１ヶ月間のオンラインによる PBL 型（問題解決型学習）の国際共修を行ったが、本稿ではこの国際共修プログラムを取り上げ、本学の学生たちが回答した振り返りシートの内容を KJ 法で分析し、プロジェクトの効果検証を試みた。語学面以外でも幅広い側面での成長を学生たちが実感していることが確認でき、グローバル人材としての能力・資質を育む機会として一定の効果があったのではないかと考えられる。

キーワード：グローバル人材育成、国際共修、KJ 法、オンライン

１．研究の背景と目的

徳島大学高等教育研究センターでは、2021 年前期より「グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resource Intensive Program）」[注 1)]を開始し、全学的なグローバル人材育成に着手した。本研究では、2021 年度後期（第 2 期生）GRIP のプログラムの１つとして実施したシンガポール国立大学の学生たちとのオンラインによる PBL 型（問題解決型学習）の国際共修[注 2)]を取り上げる。

グローバル人材[1)]の素養でも特に、「コミュニケーション能力」、「協調性」、「積極性」、「多文化（自文化・多文化）に対する理解」を育むことを目指し、GRIP では、多民族国家であるシンガポールの大学であるシンガポール国立大学の協力を得て、国際共修を実施した。

本稿では、まず、研究を行う上で用いた理論的枠組み、プロジェクトの概要説明を行っている。その上で、本学の学生たちが回答した振り返りシートを KJ 法で分析し、プロジェクトの効果検証を試みていく。

２．理論的枠組み

2.1 経験学習モデル

学生たちに「深い学び」を提供する枠組みとして、「経験学習モデル」[2)]を用いる。「経験の変容を通じて知識を創造するプロセス」であり、4 つのサイクル、「①具体的に経験する」、②「経験を客観的に振り返る」、③「振り返りからの学びを概念化する」、④「学びを次に活かすように実践する」、を繰り返すことが学びを深めるとされている。このプロジェクトでは、主要な体験の直後に学生たちが振り返りをして、その省察を次につなげる仕組みを設けている。

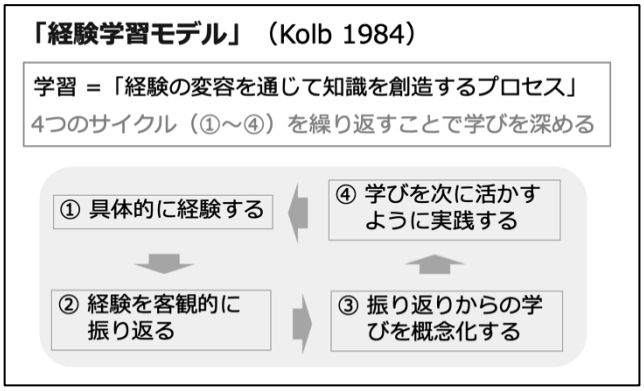

図１　「経験学習モデル」（著者作成）

2.2 異文化接触理論

「異文化接触理論」[3)]によると、国際交流で異文化間の相互理解を促すには、4 つの条件、①「共通の目標」、②「協力的な関係性」、③「平等な立場」、④「制度的なサポート（ルール）」、が保証されていることが重要である。今回のプロジェクトでは、これらを踏まえて、ルール作りやチーム編成を行うように努めている。

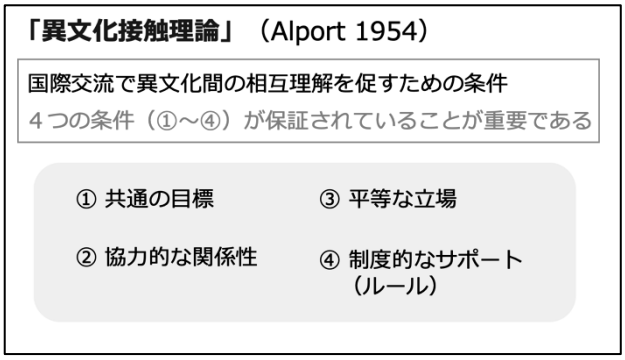

図２　「異文化接触理論」（著者作成）

３．国際共修プロジェクトの概要

徳島大学の GRIP 参加学生（以下、「TU 学生」）と、シンガポール国立大学の日本語履修（中級レベル）学生（以下、「NUS 学生」）が、チームを組んでオンライン上で協働学習をしながら、地元企業の市岡製菓株式会社[注 3)]の協力のもと、学生たちがシンガポールで売り出す徳島に因んだ新商品を考案（更に「社会を良くする」という観点も盛り込む）し、最終的に製菓会社の社長や聴衆（両大学の任意の教職員や学生たち）へプレゼンテーションを行う。このプロジェクトの実施スキームは図 3 の通りである。

使用言語は、日本語もしくは英語（中国語も可）とし、状況に応じて切り替えながらコミュニケーションを行う。TU 学生は 26 名、NUS 学生は 34 名（合計 60 名）で、混合チーム（1 チーム 6 名、各大学 2～4 名ずつ、計 10 チーム）を組んでいる。

参加者全員での交流の時間としては、下記の通りであり、基本的に NUS の日本語の授業の時間帯である 19:00～20:30（シンガポール時間では 18:00～19:30）に TU 学生がオンラインで参加をするという形を取っている。

表１　国際共修スケジュール

	日程	内容
第１回	9/24	オリエンテーション
第２回	10/1	初顔合わせ・アイスブレイク
第３回	10/2	製菓工場見学・菓子試食
第４回	10/9	社長プレゼン
第５回	10/15	中間発表会
第６回	11/12	最終発表会

10 月 1 日には市岡製菓株式会社の工場見学を行った。工場見学には、TU 学生が参加して、実際の市岡製菓の菓子の作られる工程を見学したり、併設のショップで菓子の包装やどのように売られているかを見学した。また、市岡社長から会社の特徴やこだわりなどについて講

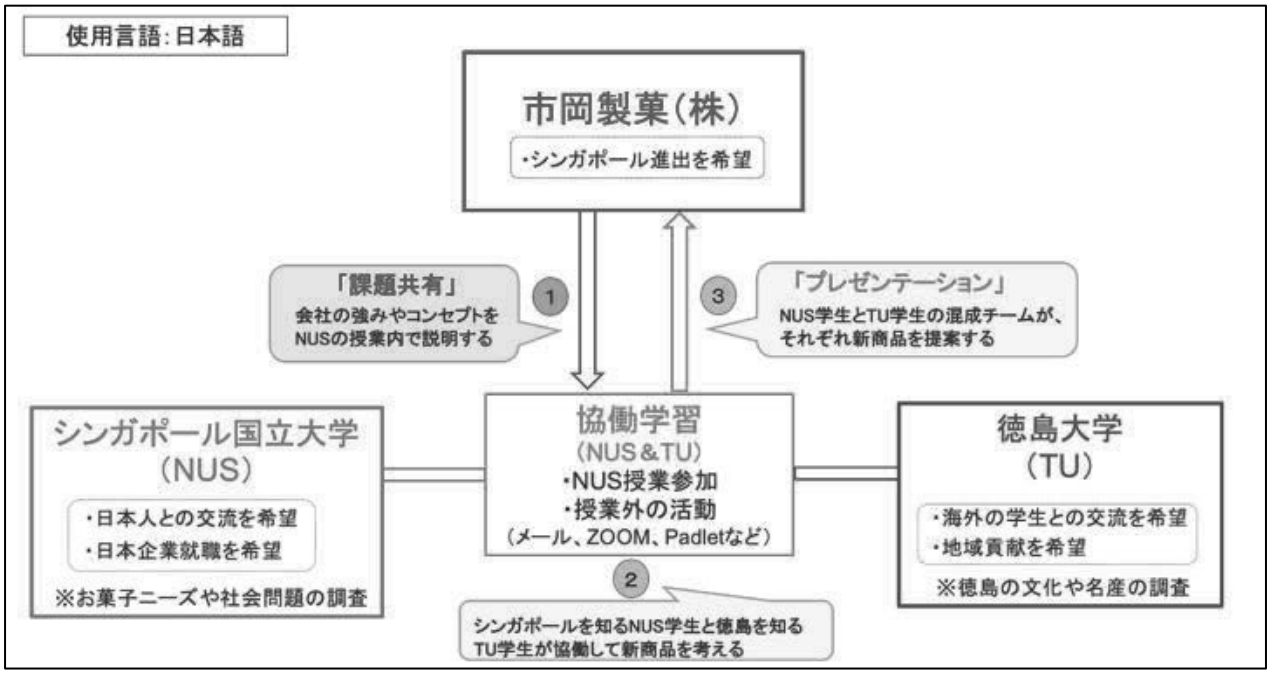

図３　プロジェクトの実施スキーム（著者作成）

義を受けた。この工場見学を今後の新商品開発にいかすために、TU 学生はチームごとに NUS 学生と情報の共有を行っている。また、両大学で菓子を送り合って、学生達が双方の国の菓子の試食をする機会も用意した。

図４　NUS との交流会の様子（著者撮影）

図５　工場見学の様子（著者撮影）

学生たちは Zoom 等を用いたオンライン会議や、教員の管理可能な掲示板アプリ Padlet（図 6）、WhatsApp などの SNS を用いた交流を通じて、プロジェクトを進めるようにデザインされている。なお、第 1～6 回の交流会の直後に「振り返りシート」を提出させて、学生の省察の機会を設けている。

図６　Padlet の交流の様子（著者撮影）

10 月 15 日に中間発表を行って、教員や他のグループから受けたフィードバックをもとに、11 月 12 日の新商品開発のプレゼン大会本番へ向けて学生達はグループごとに作業を行った。中間発表後、各グループのリーダー（TU 学生のみ）がオンラインで集まり、徳島大学の指導教員のもとでそれまでの活動を振り返る機会を提供した。また、学生達は交流会以外に、平均して毎週 3 時間ほどグループごとに会議等を行っていることを確認している。

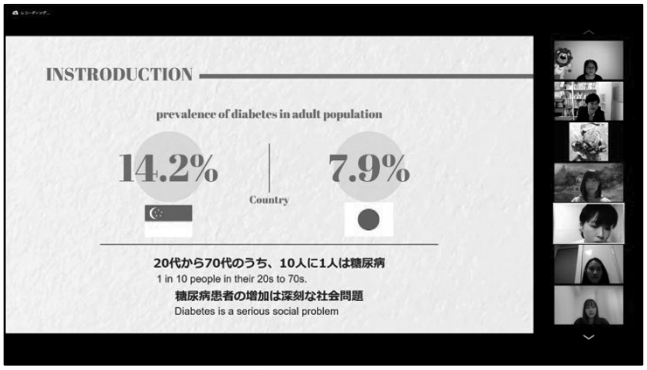

図７　最終プレゼンの様子（著者撮影）

４．調査対象者

書面による研究協力への同意を得られた TU 学生 26 名に対して質問紙調査を行った。質問紙の実施は、中間発表後のタイミング（第 3 回交流会 10/15）と最終発表会の後（第 6 回 11/12）で行い、「自分自身で特に変化を感じた点」について自由に記述（字数は 50 字以上、上限なし）してもらった。

５．研究方法

分析には、KJ 法を用いた質的分析を行い、手順は川喜田（2018）[4]に従った。具体的には、関連項目を収集した後、同等や類似点を集約してカードに記載して命名した（小ラベル）。その後、意味の近いカードを集めてグループ化してラベルを付け（中ラベル）、さらにその中で意味の近いカードを集めて、グループにラベルをつけた（大ラベル）。最後に、空間配置を行って、各カテゴリー間における相互関係を示し、分析、叙述を行った。

６．分析結果および考察

調査対象者の回答データから抽出された 71 枚のカードに対して、KJ 法を用いて質的分析をした結果、以下の表 2 のように、3 つの大カテゴリー、9 つの中カテゴリー、および 29 の小カテゴリーが生成された。また、各カテゴリー間における相互関係は図 8 のように示される。

表２　結果図（ラベル一覧）

大ラベル	中ラベル	小ラベル
交流に関する気づき	自身の積極的な態度	・グループワークでの積極的な発言
		・グループリーダーへの挑戦
		・外国人学生との会話での緊張の軽減
	国際交流や国際共修に関する気づき	・国際共修の楽しさの気づき
		・国際交流の楽しさの再認識
		・学内の国際交流参加への動機付け
		・国際共修の成功による大きな自信
		・やり遂げた達成感
	相互理解・尊重への姿勢	・相手を尊重しながら意見を言う姿勢
		・相手が不安にならないように配慮した姿勢
	オンライン上での工夫	・雑談を増やして距離を縮める
		・画面共有などをうまく活用する
文化に関する気づき	異文化に関する関心	・シンガポール文化理解を深めようとする意識
		・シンガポール文化に対する関心の高まり
		・海外文化理解への意識の高まり
	自文化に関する関心	・日本と海外文化の共通点への関心の芽生え
		・自身の文化への関心の高まり
		・外国人へ日本文化を知ってもらいたい欲求の高まり
	社会問題やマーケティングへの関心	・文化や社会問題に対する関心の芽生え
		・マーケティングへの関心の芽生え
言語に関する気づき	多言語使用に関する学び	・メールでの日英に言語の同時使用
		・できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え
		・日本語力の低い学生とのコミュニケーションの仕方の習得
		・日本語が通じない時に英語に切り替える方法の取得
	英語に関する学び	・英語学習の動機付けの高まり
		・英語をツールとして捉える意識の芽生え
		・英語リスニング力の大切さへの気づき
		・英語スピーキング力の大切さへの気づき
		・英語での円滑なコミュニケーション方法の模索

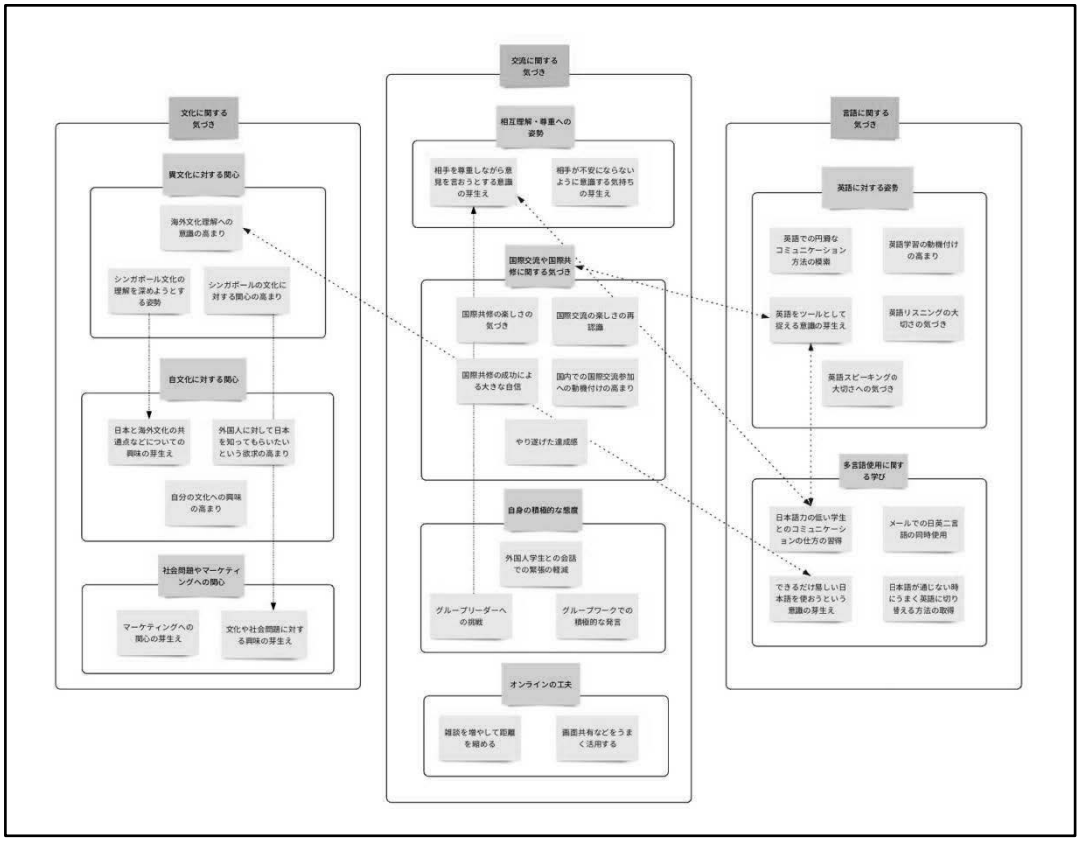

図８　KJ 法の結果図

この学生達の成長実感を分析から、以下のことが明らかとなった。なお、記述中における【 】は分析で得られた大カテゴリー、《 》は中カテゴリー、〈 〉は小カテゴリー、「 」は振り返りシートの研究協力者の生のデータである。

6.1 【交流に関する気づき】

*「異なる文化の人と話すときにあまり緊張しなくなった」や「伝えようとする気持ちがあればなんでも伝わるものだと気づき、あまり身構えなくなった」*の記述のように、交流がオンラインであっても〈外国人学生との会話での緊張の軽減〉の効果が見られたことが確認できた。今回の交流では英語に苦手意識を持つ学生も多く参加していたため、第1回交流の顔合わせで日本語のみでの交流時間を設けたが、良いアイスブレイクの機会となっていた。その意味でも、国際共修の交流相手を日本語学習者にするのは一定の効果があると考えられる。

*「相手の意見を尊重しながら、自分の意見を述べる力が向上したと感じる」*の記述のように、学生達は異文化間での協働学習を通じて、《相互理解・尊重への姿勢》が身についていることが確認できた。また、*「初めは不安でいっぱいでしたが今は達成感でいっぱいです」*の記述にあるように、国際共修のプロジェクトで〈やり遂げた達成感〉を得ており、また、*「失敗を恐れず、とりあえずやってみることで見えてくるものがあると学んだので、今までのように自信を失って何もしないのではなく、様々なことに挑戦していきたいと思う。」*の記述のように、〈国際共修の成功による大きな自信〉を得ていることが確認できた。コロナ禍で海外渡航に制限がかかったとしても、オンラインであっても1ヶ月におよぶPBL型の国際共修に取り組むことで、学生たちに達成感や自信を得る機会を提供することができたと考えられる。

今回のプロジェクトでは、*「初めは、周りが言う意見に頷くことしかできなかったが、徐々に主体的にプロジェクトに関わるようになった。」の記述のように*、《自身の積極的な態度》の変化を自覚している学生が極めて多かった。これは、国際交流で異文化間の相互理解を促す「異文化接触理論」の4つの条件のうちの「協力的な立場」「平等な関係性」について、この重要性を参加学生たちにも共有できたためであると考えられる。*実際に、「シンガポールの学生が主導でプロジェクトを進めてくれていたが、それではお互いの関係として良くないと感じ、もっと貢献できるようにミーティングでしっかり議論を回したり、意見を言ったりと受動的な参加から、もっと能動的に参加しようと思い毎週取り組むようになった」*という記述や、*「役割分担などで当てられたらする、という感じのことが多かったけれど、今回のプロジェクトを通して、一人ひとりがチームに貢献することがとても大事だったため、「何かできることはないか」と考えてどんどん動くことが出来るようになった。」*の記述からも、その点を理解できる。

オンラインによる交流の制限もあると考えられるが、*「チャットや画面共有を有効活用することでオンライン上でもコミュニケーションを上手くとることが出来たので、この力も今後役立てることが出来ると思います」*の記述のように、学生たちは《オンラインの工夫》を行いながら前向きにプロジェクトを進めていたことが確認できた。社会のあらゆる現場でオンライン化が進み、コロナ禍後も海外とのオンライン会議も当たり前になる可能性を踏まえると、このようなオンラインでの PBL 型の国際共修には教育的な意義があると考えられる。

6.2 【言語に関する気づき】

*「このプロジェクトに参加する前から、積極的に物事に取り組む姿勢は持っていた。しかし、それは日本語を使う機会に限定され、英語を使う場面になると黙ってしまうことが多かった。しかし、このプロジェクトでの話し合いを通じて、単語を1つでも思い付けばコミュニケーションができる可能性があること、テストのように綺麗な英語を話す必要がないことを学んだ。」*の記述にあるように、〈英語をツールとして捉える意識の芽生え〉が生じたことが確認できた。グローバルな場で活動を行う場合、仮に流暢な英語ではなかったとしても英語をツールとして捉えてコミュニケーションを取る意識が重要であると言われるが、この国際共修ではこの点を学ぶ機会として一定の効果があったと考えられる。

また、*「簡単な日本語を使わねばならず、自分の中の日本語の引き出し、説明力が上がったと思う」*の記述のように、〈できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え〉が生じていることが確認できた。グローバルな現場では英語が共通の使用言語になることは多いが、外国人との協働は日本の地域社会でも求められており、その際の使用言語は日本語が主である。英語をツールとして使用するのと同じように、日本語も外国人からツールとして用いられることを踏まえると、この〈できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え〉を学生に持たせることは重要であると考えられる。

6.3 【文化に関する気づき】

*「交流の中で自分があまり徳島のことや日本のことに詳しくない事を感じたので、自文化についても学ぶ必要性を感じました。」*の記述のように、《自文化に対する関心》の高まりが確認できた。グローバル人材には、自文化を理解し、尊重する姿勢が求められているが、その力を身に付けさせることは容易ではない。しかし、*「今まで私は日本文化、特に地元の文化についてわかっていたつもりでした。しかし、ここで求められるのは徳島の文化がメインであるため日本の文化について知っているつもりでも具体的な地域の文化については近くても知らないことがあまりにも多いということを知りました。」*という記述にもあるように、このプロジェクトでは、TU 学生が徳島の文化を十分に理解していないとプロジェクトが進まないという仕掛けを作っていたが、それが非常に効果的だったと考えられる。

また、*「相手の文化や習慣について理解を深めようと質問したり調べたりするようになったと思います。」*の記述にあるように、《異文化に対する関心》が高まっていることも分かった。さらに、*「自分が今まで知らなかったシンガポールのことを詳しく調べるようになり、文化や社会的な問題についても興味を持つようになった。」*の記述にあるように、〈文化や社会問題に対する興味の芽生え〉が生じたことも確認できた。このプロジェクトに参加をしている時点で参加学生は海外文化に理解を示したり、尊重をする姿勢はある程度持ち得ていると考えられるため、その一歩先の深い理解を促す工夫がデザインする教員側には求められる。生たちに〈文化や社会問題に対する興味の芽生え〉を持たせることができたのは、新商品の開発のルールに「新商品によって社会がどのように良くなるのかを説明する」ことを加えていたことが効果的だったと考えられる。

7．今後の課題

本プロジェクトを通じて、広義でのコミュニケーション能力や多様性の受容、チームで協働する力、問題解決力など、語学面以外も含めた幅広い側面での成長を学生たちが実感していることが確認できた。グローバル人材としての能力・資質を育む機会として、一定の効果があったのではないかと考えられるが、今後は、本プロジェクトの改善点についても調査を行って、より良い国際共修プログラムの運営および実施の参考としたい。

謝辞

今回の PBL 型の国際共修を実践するにあたり、市岡製菓株式会社の社長はこちらからの申し出に対して快諾してくれただけではなく、TU 学生の工場見学の手配をしてくれたり、TU 学生や NUS 学生が菓子の試食ができるように多くの菓子を提供してくれた。多大な協力をして下さった市岡製菓株式会社の市岡社長をはじめ関係の皆様に、心より感謝いたします。

注

11. 徳島大学高等教育研究センターでは、2021 年度から全学的なグローバル人材育成を開始した。自国および他国の文化を尊重し、外国語による高いコミュニケーション能力を持って、多様な人と協働できる力を養うことを目的としている。
12. 本稿では、国際共修を「異文化間の相互理解を促すことを目的に仕掛けられたプロジェクト等の協働活動」（末松 2019；松村 2016）[5) 6)]と定義する。
13. 市岡製菓株式会社（http://www.ichioka-seika.co.jp）は、1973 年に設立された徳島に拠点を置いている。ベトナムにも工場があり、シンガポールでの商品販売の展開を検討しているとのことで、今回の本学からの協力の申し出に快く引き受けてくれた。

引用文献

1) グローバル人材育成推進会議(2012)「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進 会議審議まとめ)」 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011 matome.pdf(最終アクセス日:2021 年 10 月 30 日).
2) Kolb,D.A.(1984). Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. FT Press.
3) Allport, W.G. (1954). The nature of prejudice, Cambridge, MA:Addison-Wesley.（オールポート W.G. 原谷達夫・野村昭共訳(1961).『偏見の心理』 培風館.）
4) 川喜田二郎（2018)『発想法　創造性開発のために（改版)』中公新書
5) 末松和子ほか(2019)『国際共修:文化的多様を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
6) 松村真宏（2016)『仕掛学』東洋経済新報社.